

## オタモイ海岸

龍宮閣跡地付近からオタモイ海岸を見たようす。左手の崖上にオタモイ地蔵（右ページ下の写真）をおさめた地蔵堂と関連施設がある。本記事執筆現在、土砂崩れのため立ち入りが禁止されている。

取材文 高野宏康（一般社団法人日本海洋文化総合研究所）

協力 オタモイ地蔵尊奉賛会

# オタモイ地蔵

～断崖絶壁の秘境にいまも息づく祈りのかたち～



海風が岩肌を走り抜け、白波が岸を叩く。北海道小樽市の西部に広がるオタモイ海岸——断崖絶壁が連なり、奇岩が並ぶその風景は、道内でも屈指の秘境として知られる。

昭和初期、この地に遊園地と料亭「龍宮閣」が建てられ、一大リゾート地として賑わった。しかし、昭和27（1952）年の火災で消失し、その後の再開発計画も幾度となく頓挫。今は、静寂の中に往時の記憶をとどめている。

そもそも、人々がオタモイに心を引きつけられるようになった原点は、江戸時代末期に建立された「オタモイ地蔵」にさかのぼる。

この地蔵は、北前船の遭難犠牲者供養のために建立されたものである。弘化4（1847）年、越中魚津（現在の富山県魚津市）の若い娘が、ある青年の子を身ごもった。しかし、両親の反対により、青年は蝦夷地（現在の北海道）に渡ってしまう。娘は北前船に密航して青年を追うものの、積丹半島・神威岬沖で嵐に遭う。

当時、この岬は女人禁制であった。娘は神の怒りを鎮めるため、船から身を投げた。オタモイ浜に流れ着いた娘の遺体からは、乳が流れ出て海を白く染め上げたという。この話を聞いた当時の場所請負人であり、北前船主の住吉屋西川家の支配人徳兵衛は、翌年、同家の地元、近江産の石を刻み、地蔵を建立した。

地蔵は、明治26（1893）年ごろから、子宝地蔵として篤い信仰を集めることになる。全国各地

から、多い日には数千人もの参拝者が訪れた。同家が建立した供養地蔵は100体を数え、オタモイ地蔵もその一つとされる。

供養地蔵のことは時がたつ間に同家では忘れていたが、昭和3（1928）年、11代目吉之助が古文書を手がかりに、その内の6体を再発見した。供養のため、安置場所に青銅製香炉が寄進された。後に1体が追加され、「忍路高島七地蔵」として巡拝が開始された。その中で、オタモイ地蔵は特に篤い信仰を集め、独自の存在感を持つようになった。

その後、度重なる土砂崩れによって、平成18（2006）年には海側の参道が立ち入り禁止となった。参拝者は減ったが、祈りの灯は消えなかった。令和5（2023）年、明治以来、地蔵を守り続けてきた村上家の堂守が亡くなり、存続が危ぶまれたが、地元有志が引き継いだ。

そして今、日本財団「海ノ民話のまちプロジェクト」によって、この物語が短編アニメとして、新たな形でよみがえる。オタモイの海を見つめる地蔵の祈りは、時を越えて、未来へと受け継がれようとしている。

